

高鈴山に登って

A . H

今回初めて山仲間アルプに参加させていただきました。事前に山仲間アルプの話は授業でも聞き、実際に視覚障害の方も一緒に登山をすることができるということは知ってはいましたが、私は視覚障害の方が登山をするということとはとても困難で危険なことのように思っていました。しかし実際に参加してみて驚かされました。自分が思っていたよりも視覚障害の方の足取りは軽く、私自身も躊躇してしまう岩場まで同じように無事に登ることができたのです。私は山仲間アルプを知る以前は視覚障害の方が登山をするということ自体考えもしなかったし、視覚障害の方は登山ができないものだと思いつけていたことに気付かされ、自分がいかに無知であったか恥ずかしく思いました。私は今回の登山を経験して“自分の視点ではなく、相手の立場にたって必要なサポートを考えサポートする”ということの重要性と難しさを学びました。いくらサポートをしようと思ってもそれが相手の立場にたっていないければまったく意味がないのです。私はサポートをする際に「あと少し右に足を出して下さい。」とか「前に段差があります。」などという言葉がたくさん使いました。しかしこれはまったく視覚障害の方の立場にたっていないサポートだということに気付かされました。“あと少し”とは私から見た“あと少し”であり、視覚障害の方にとってはそれが10センチ先のことなのか50センチ先のことなのか1メートル先のことなのか判断することができないのです。“段差”という言葉も同じです。視覚障害の方は“段差”という言葉だけでは下りの段差なのか上りの段差なのか判断できないし、高さ何センチの段差かも判断できません。このように相手の立場に立たないで自分の視点だけでサポートするということがいかに危険で意味のないものかということを考えさせられました。

私は登山中に何回か目を閉じて歩いてみました。ただでさえ山道はゴツゴツしていて不安定なので、目を閉じて歩くのは非常に不安だし怖かったです。だから一緒に登山している視覚障害の方が本当にすごいと感じました。しかしそれと同時に目を閉じていると鳥や虫の声、風に揺れる木々のざわめき、肌に触れる風の感触を一層強く感じることに気がきました。たとえ目が不自由でも匂いや音、風をより敏感に感じるすることができます。障害が有ろうと無かろうと自然の中ではすべての人が自然を感じ楽しむことができ、そこには差別など存在せず自然はすべての人を同じように受け入れてくれているように感じました。普段の都心での生活では障害の有無が線引きされているように思いますが、自然にはそれらを取っ払う力があると思いました。私は今回の山仲間アルプに参加した経験は自分にとって非常に大切で大きいものになったと思います。自分の視点ではなく相手の立場に立ってサポートすることの大切さ、自然のもつ力や美しさなど学ぶことができました。そしてちょっとしたサポートや理解により、障害をもつ人とたない人が共に楽しむ場がより多く生まれる可能性を感じました。今回山仲間アルプに参加させていただいたことをありがたく思います。